

2ヶ月間に渡って、北九州 YMCA 学院で日本語教師の教育実習をし、無事に終えることができました。学習者は20人程の日本に来て間もない同世代の方々です。今日はこの2ヶ月で行った3回の授業を通しての、私の教育実習の課題と成果についてまとめていきます。

10月24日初日は、Yさんと私で50分の授業を担当しました。この日は初日ということもあり緊張しました。20人もの人に1度に注目されるという経験が今までにあまりなかったもので、普段通りにということを中心に心掛けたものの圧倒されてしまいました。気付いたことがいくつかあります。まず初めにリスニング問題で、「日本人はあなたの国について、よく知っていると思いますか？」という問いがありました。これに対して私が学習者の答えに、「どうして知らないのだと思いますか？」と尋ねてしまいました。これはとても答えにくかったらうなと思います。質問した後に、今の質問まずかったなと気づきました。「日本についてどう思いますか？」という問いでは、「日本は綺麗な国だと思います」という答えが上がって、「どうして綺麗だと思いますか？」とこれもまた学習者にとって答えにくい質問でした。反省会でこれの改善策として、どう～やどうして～は答えにくいから、「どこが綺麗ですか？」など具体的な言葉が出やすい質問に変えたら良い事を教えて頂きました。学習者から答えを引き出しやすいようにし、時間を取られないように気を付けたいと感じました。加えて、学習者と私達が短い会話をするとき、自発的に話そうとする人と、会話が續かないから助けてほしいという人の状態の見極めも非常に大事だと感じました。学習者が話そうとしている時は、こちらは待つ姿勢を見せ、言葉に詰まっているような時は、該当するような言葉をいくつか提示してあげられるのが教室ならではの授業だと思います。そして、周囲の人も会話に参加できるようにし、「皆さんも同じですか？」と問うのは良いやり方だと思いました。私はこの1回目の授業は緊張で「えっと」を多用しがちで、会話を上手く膨らましたり、回したりすることまで考えきれず、目の前だけに必死だったと振り返ってみて感じました。

11月14日2回目の授業は、25分の授業を初めて1人で行いました。出だしで、沢山の答えを出して貰いたかったので、「私はこれから沢山質問をしていきますので、皆さんも沢山私に教えてください。」と言ったのですが、上手く伝わりませんでした。学習者には恥ずかしいという気持ちをあまり持たずオープンな方ももちろんいますが、発言したくてもしにくい学習者もいると感じました。どうしたら発言しやすい雰囲気が作れるのか、先ほどの質問を言葉にしなくても良いようにするにはどうしたら良いのか、これを機に考えてみました。まずは勇気を持って発言してくれた学習者を褒めることから始めてはどうだろうかと思います。「良い答えですね」「なるほど、面白いアイデアですね」「良い質問ですね」これらの言葉をまずは掛けてあげることで学習者は「発言してよかった」「認めてもらえた」と良い気持ちになるでしょう。実際にある授業で挙手制で発言するクラスがあり、その先生はどんな時もまずは答えを受け止めてくれるので、みんなの前で恥をかくという思いをしません。特に発言が珍しい学習者には、最初

の受け止めに気をかけてみようと思います。質問に1つ1つ答えると時間を取られるので、時間配分はきちんと気にしながらも、学習者とのコミュニケーションのチャンスと捉えて、できるだけ拾ってあげたいと思います。2つ目は学生自身に答えを導かせるように仕向けることです。教師が「それはこうです。」と言い切ると終わってしまいますが、学生はヒントをもらったり少し待ったりすれば、自分で答えを導き出せると思います。また、他の学生に聞けば、答えを知っている学生が教室に1人はいると思います。だから、教師は教える立場だけでなく、時には全体の司会者のような立場にも立ち、状況に応じて役割を変更することが望ましいと考えます。そうすることで、自分で答えに辿り着けたという喜びを感じ、また発表したくなると考えました。

11月28日最後の授業は、Uさんと一緒に50分の授業を行いました。打ち合わせを何度もしたので、活動前の流れは順調にいったと思います。今回の授業で大半を占めた、社長、部長、会社員の役割を演じるロールプレイでは、学習者は初めは戸惑いながらも、グループに分かれて慣れてくると、やる気を持ってくれて時間いっぱい活動してくれたのがとても嬉しかったです。私が担当した学習者グループでは、「はい」「いいえ」に伴う「つけました」「開けました」「消しました」などの動詞の語尾の変換に、ほぼ4人とも苦戦していました。間違いに気付く直さないといけないと思って何度か直したら、学習者が少し苛立ちを見せたので困りました。訂正は必要だけど訂正しすぎるとやる気を損なってしまうので、気をつけたいと思いました。私個人としては間違いを直してもらった方が有り難いと思い、指摘されても特に何も感じないのですが、それは教師との関係性も関係があるかもしれません。もう少し距離が近くなったら、そうしてもらえるかもしれません。しかし、内容としては、学習者が「少し努力したら答えられる」というくらいのレベルで授業の復習すると、効果的な授業が行えるのではないかと感じています。

今回の実習の課題として、私はよく喋りすぎてしまう傾向があるので、先ほど述べたように学習者にもっと喋らせた方がいいのか、助けを求めているのかを見極め1人で進めようとしないうようにしたいと思いました。よく話し上手な人は聞き上手、話を引き出すのが上手と言われますが、正にそうで、授業は学習者を巻き込まないと成り立たないと痛感しました。変容したこととして、今の発言は良かった、良くなかったと自分自身で気付けるようになったことです。もし気付けないと授業を改善していくことが厳しく、いつまでも同じ授業スタイルの繰り返しになると思います。今後、教える立場になったら、毎年同じやり方で教えるのではなく、良くないことは良くないと認めて、柔軟に変えていき、毎年成長した授業をしていきたいと思いました。更にもう1つ、教師とはなんだか特別な存在な気がして自分には向いていないと思っていましたが、学習者が自発的になってくれたり、分かった顔をしてくれたりすると、もっと教えてあげたいと思えるようになりました。そこは日本語教師養成課程の中で大きな進歩かと思います。私は前回のレポートで、「できるだけ沢山の例を出して、学習者にその言葉の抽象的なイメ

ージを与えて教える方法」を提案しました。なぜなら1つの意味で覚えても言葉には複数の意味があるので、応用が利かないからです。そして単語として覚えても実際に使えないというパターンが、英語の学習で頻繁にあるからです。将来日本語を教える時が来たら、実用的な使い方を提供し、会話やライティングの時間を多くとって文章を学習者に作らせる機会を与えたいという目標ができました。前期に比べて、より一層の授業構成を練り、実習の材料を作らなければならなくとてもきつかったですが、どの授業でもどうしたら分かりやすく伝わる授業ができるか、学習者が飽きずに授業に集中してもらうにはどうしたら良いかを第一に考えて取り組みました。教案のコメント、リハーサルでの同級生の授業、YMCAでの授業見学、教育実習後の反省会全てで、「こんなティーチャートークがあるんだ」「絵は動かさないで止めた方が見やすいんだ」「教材を剥がすときは一緒に声を出して復習しながら剥がすのか」などなど、数々の学びを得ました。教師としての知識はもっと自分で身につけないといけませんが、技術的なことは現場でも多く知れたと思います。なにより、同級生のリハーサルや教室での授業は、普段の顔とは違って、自分の授業へのやる気とエネルギーになりました。初め、授業が教師だけで孤立してしまったらどうしようという不安がよぎりましたが、横溝先生がおっしゃった通り、「学習者は仲間」という言葉がぴったりで、教室は先生だけが作るのではなく、学習者と共にみんなで作るものだということを今回一番感じました。この言葉を心に留めて、将来はリラックスして授業を行なっていけるようになりたいです。